

# パネル「震災と仏教」開催趣旨・問題提起

師 茂樹

## 1. プログラム

- 1) 13:40～13:50 師茂樹（趣旨説明・問題提起）
- 2) 13:50～14:20 末木文美士「脱魔術化と再魔術化—震災から日本の仏教を考える」
- 3) 14:20～14:50 佐藤哲朗「初期仏教から見た震災と慰霊—日本仏教「再仏教化」への提言」
- 4) 14:50～15:20 北條勝貴「環境史・災害史からみた〈創られた伝統〉」
- 5) 15:20～15:40 石井公成（発表者に対するコメント）
- 6) 15:40～16:10 ディスカッション

## 2. 開催趣旨・問題提起

昨年3月11日の東日本大震災を契機に、仏教や仏教研究の意義などについて、数多くの発言、提言が仏教者・仏教研究者から発せられ、現在もそれは続いている。自然、環境、社会、科学技術、生命観、死者観などと、仏教の教理・思想・伝統などとの関連について多くの問題が噴出することになったが、それらを実証的に、あるいは理論的に検討したものは少なく、逆に「今こそ心の時代だ」というようなありきたりな文言が多く流通している状況ではないかと思われる（→末木報告）。

仏教学は、方法論として客観主義的な文献学を標榜することが主流であるが、歴史学や人類学などの方法論的な反省においては、客観的とされてきた研究方法が実は近代人である研究者の主観と不可分な実践であることが指摘されている。末木文美士氏が日本近代仏教研究の重要性について、

私の研究はこれまで、日本古代・中世の仏教を主たる領域としていた。ところが、その研究を進める中で明らかになったことは、古代・中世の仏教に対する今日の常識が決して古くからあるものではなく、明治以来の近代的研究によって形成された部分が大きく、かつまた、それが単に学術的な観点からのみでなく、古典の近代的な読み直しによる新しい解釈という面を強く持つということである。<sup>1</sup>

と述べているように、近年では仏教学においても同様の問題意識がもたれるようになってきている。仏教学の研究者が、たとえ遠い過去に書かれた文献の分析について論ずる場合においても、「自分の研究は文献学だから、自分の主義主張とは関係がない」というような態度を取ることはできないのではないか、と思われる。

そして、このような問題は、自然災害や震災あるいは戦争等が起きた際に、典型的に、しかも歴史上何度も繰り返してなされてきたことが環境史などの研究によって指摘されている（→北條報告）。たとえば「仏教の自然観」「震災と仏教」などといったテーマについて、仏教者や研究者が発言するときにも、問題設定から文献の解釈、価値判断などが“現代の我々の問題意識や不安感などによって形成された部分が大きく、それが単に学術的な観点からのみでなく、古典の現代的な読み直しによる新しい解釈という面を強く持つ”のではないかと思われる。

そして、先に述べた歴史学や人類学における方法論的反省においては、そのような何らかのかたちで「主観」を含まざるを得ない研究活動が、ときにその「客観的」なあり方によって主観を隠蔽し、研究対象が反論できないことをよいことに、研究者が自らの主観を代弁させているのではないか、という問題が指摘されている（典型的には、知識人とサバルタンとの問題など）。仏教研究であれば、研究対象（釈尊や祖師、その他文献。自然や災害の話で言えば神・被災者・死者など）に自身の考えや、不安の解消のための理屈を代弁させ、正当化

<sup>1</sup> 末木文美士『近代日本の思想・再考I 明治思想家論』（トランスビュー、2004）、1頁。

しようとする危険性がともなう（これはもちろん、自然や震災以外の研究にも全般的にあてはまるだろう。→佐藤「近代仏教学の欲望」）。

もちろんそのような危険性があることから、仏教（学）者は口を閉ざすべし、ということを主張したいわけではない。逆に、そのような前提を共有しつつ、仏教（学）における叙述とはどうあるべきか、仏教（学）における研究対象との関わりはどのようなものなのか、今なぜその文献について論じられなければならないのか、というような方法論的な反省をするための契機だととらえるべきではないだろうか。末木氏が上の発言で近代仏教研究の必要性を主張しているように、まさに現在の我々の問題意識や「新しい解釈」が成立する基盤に対して（近代仏教に対するのと同じように）眼差しを向け、それを研究対象として批判的に検討する必要があるのだろう（→北條「創られた伝統」）。

性急に「仏教（学）の価値」を求めるのではなく、かといって自らの無力に絶望することもなく、仏教学の方法論・仏教の実践論・環境史／災害史の研究などをめぐる各パネリストによる問題提起を通じて、実践としての仏教（学）的言説の問題について議論できればと考えている。パネリストとして、仏教（学）における倫理の問題や、仏教学の方法論的な問題などについて取り組んできた研究者（末木・石井）に加え、環境・災害と宗教をめぐる言説史や、歴史学の叙述の問題などの方法論に詳しい研究者（北條）、テラワダ仏教という日本仏教的な言説を相対化する視点に立脚しながら原発問題などに取り組む実践者（佐藤）を外部から招くことで、このパネルを仏教（学）者の自己弁護、自己正当化の場にせず、批判的で建設的な議論の場にした。